

## 明治44年（1911）羅馬万国美術博覧会と平山英三

天貝 義教

明治44年（1911）にイタリア王国の建国五十周年を記念して、トリノ市では万国産業博覧会が開催され、ローマ市では万国美術博覧会が開催された。日本は万国博覧会出品協会を組織し、それぞれの会場に出品参加した。トリノ会場には独立した展示館を建設しなかった日本は、ローマの万国美術博覧会場には特別展示館を建設した。平山英三は万国博覧会出品協会の理事長として現地イタリアに派遣され、帰国後に日本の日用の工業製品の意匠図案についていくつかの論評を発表した。主としてトリノ会場に滞在した平山英三の残した日記によれば、平山がローマ会場をしばしば訪ね、同じく出品協会の理事として現地に派遣されていた彫刻家長沼守敬と行動を共にしていたことが読み取れる。本論では、平山英三の日記を手掛かりにして、万国美術博覧会が開催されたローマにおける平山の体験を明らかにするとともに、平山と長沼との交流関係について明らかにする。

キーワード：明治44年（1911）羅馬万国美術博覧会，平山英三，長沼守敬

## The Rome International Exhibition of Fine Art in 1911 and Eizo Hirayama

AMAGAI Yoshinori PhD

Eizo Hirayama was dispatched to the International Exhibition held in Turin, Italy, as head of the Japanese Exhibition Committee in 1911. During the exhibition, he often visited Rome where the International Exhibition of Fine Art was held. Japan did not build a special pavilion for the Turin exhibition, but, for the Rome exhibition, built a Japanese-style pavilion where Japanese-style paintings and sculptures were on display. According to his diary, Hirayama inspected the foreign pavilions of the Rome exhibition and walked around the city of Rome not only to observe museums, churches, and the remains of the Roman Empire period, but also to visit cafes and restaurants with Moriyoshi Naganuma, who was dispatched to Italy as a member of the Committee. In his articles on the exhibitions, Hirayama reported that various Japanese exhibits were appreciated by visitors to the Turin and Rome exhibitions, and that the style of current European industrial products and furniture showed the change from the traditional Western art style to the new style, which was characterized by simple form and soft color. In this paper, I investigate not only Hirayama's experiences in Rome, but also the relationships between Hirayama and Naganuma in Italy.

Keywords: The Rome International Exhibition of Fine Art, Eizo Hirayama, Moriyoshi Naganuma

## はじめに

明治44年（1911）にイタリア王国の建国五十周年を記念してトリノ市ならびにローマ市において万国博覧会が開催された。トリノにおいては、市の東部を南北に流れるポー川の西岸に沿った現在のヴァレンティーノ公園を会場にして万国産業博覧会（Esposizione Internazionale delle industrie e del lavoro in Torino）が開催され、ローマにおいては、現在のボルゲーゼ公園の北西部に位置する国立近現代美術館（Galleria Nazionale d'Arte Moderna e Contemporanea）の周辺地区を会場として、万国美術博覧会（Esposizione Internazionale di Belle Arti in Roma）が開催された。日本は、政府の補助のもとに伊太利万国博覧会出品協会を組織し、両会場に出品参加し、トリノ会場には独自の展示館を建設しなかったものの、ローマ会場には日本の歴史的建築様式にもとづいた特別館を建設した。

このトリノとローマで開催された万国博覧会への日本の参加については従来デザイン史的な観点からは注目されておらず、まとまった研究は日本においてほとんどなかったといつてよい。そうしたなか、筆者は伊太利万国博覧会出品協会の理事長としてイタリアに派遣された平山英三がヨーロッパ滞在期間に残した日記と帰国後に発表した博覧会関連の論説ならびに商品改良会における批評を手がかりにして、主としてトリノの万国産業博覧会への日本参加と当時の日本における日用品に関する意匠と図案に対する考え方、すなわちデザイン観の変遷との関係について、その一端を明らかにする研究発表を意匠学会55回大会においておこなった<sup>1</sup>。

本論では、その研究成果を踏まえながら、同じく平山英三の残した日記を中心にして、万国美術博覧会が開催されたイタリア王国の首都ローマと平山英三との関係を明らかにする。平山の日記によれば、出品協会の理事長としてトリノを中心に滞在した平山は、三度にわたってローマを訪問したことが読み取れ

る。さらに、日記によれば、トリノならびにローマにおいて、同じく出品協会の理事として現地に派遣されていた彫刻家長沼守敬と公私ともに行動していたことも読み取れる。本論ではこうした二人の交流にも注目する。

## 1 ローマ美術万国博覧会への日本参同

明治44年に開催されたトリノならびにローマにおける万国博覧会への日本の参同の経緯は、外交史料館所蔵の外交文書<sup>2</sup>ならびに平山英三が理事長を務めた伊太利万国博覧会出品協会によってまとめられた報告書<sup>3</sup>によって知ることができる。ローマ会場における出品物である絵画・彫刻作品については、農商務省が編纂した『伊太利万国博覧会出陳新古美術品図録』<sup>4</sup>から知ることができる。出品協会の報告書によれば、これとは別に、「出品目録六千部ヲ印刷シ広く一般ニ配布」<sup>5</sup>したとあるが、この目録（カタログ）については現在のところ不明である。同じく報告書によれば、トリノ会場における出品物についても、「七十四頁ニ渉ル出品目録一万部ヲ編成シテ一般ニ配布セリ」<sup>6</sup>とあるが、この目録（カタログ）も現在のところ不明である。

ローマにおける万国美術博覧会場には、イタリア・イギリス・ドイツ・日本・スペイン・ベルギー・ロシア・オーストリア・セルビア・

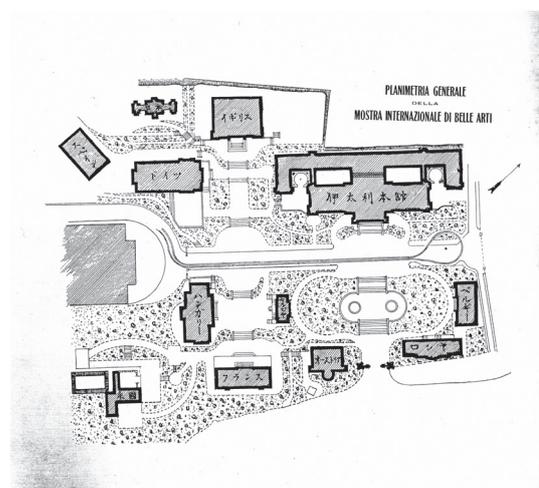


図1



図2

フランス・ハンガリー・米国が参加し、現在のボルゲーゼ公園の北西部の丘陵地にそれぞれ独立した展示館（図1）を建設した。出品協会の報告書によれば<sup>7</sup>、当初の参同計画では、日本はローマ会場に特別館を建設する予定はなかったものの、駐イタリア大使の林権助男爵より、「諸強国ハ皆特別館ヲ建設シ居レル以テ日本モ是非共自国ノ特別館ヲ建設セラレタリ」との懇請もあって、「羅馬博覧会事務局」に二万五千元を提供し、建設の任にあたらせるとともに、「日本式特別館設計図」を送付したとある。日本特別館（図2）は、結果として、規模を縮小して建設され、装飾その他の費用として、別に五千元を「主出」したという。ローマに送付されたという設計図については、その詳細は現在不明である。

また外務省の記録<sup>8</sup>によればイタリア側の博覧会総裁から、「英仏独等の世界強国の例に倣い」特別の美術館の建設を懇請してきたという。日露戦争後の1910年代当時、日本は、東アジアに位置しながらも工業化を進めた国家として国際的に認識されていたといっただろう。

平成27年（2015）現在では、イタリア本館とイギリス館がほぼ当時の姿をととどめながら、それぞれ国立近現代美術館（Galleria Nazionale d'Arte Moderna e Contemporanea）（図3）、ブリティッシュ・スクール（The British School at Rome）（図4）として使用されている。日本特別館が建設されたと思われる敷地には、サピエンツァ・ローマ大学建築学部（Sapienza Università di Roma-Facoltà di Architettura）の校舎が第一次世界大戦後に建



図3

設されて現在にいたっている（図5）。

平山英三は、伊太利万国博覧会出品協会理事長として、深沢理三郎協会事務員を従えて、明治44年1月4日に横浜港から、日本郵船会



図4

社熱田丸に乗船し、「マルセール港」を経て、同年2月23日に「チュラン」に到着している。同協会理事の長沼守敬は、平山に先立って、明治43年（1910）12月7日に、東京を先発し、日本出品事務監督のためにイタリアに派遣された鶴見左吉農商務書記官とともに「伊



図5

国子一プルス港」を経由して、翌年1月22日にローマに到着し、日本特別館の敷地の実地検分とならんで日本大使館との打合せわせなどをおこなったのちに、同月26日にローマを発って、その日のうちに「チュラン」へ到着した<sup>9</sup>。

トリノならびにローマの博覧会はそれぞれ開期が延長され、平山理事長は、博覧会事務の終了間近の明治45年1月13日マルセーユ発の日本郵船会社三島丸に乗船し、同年2月19日神戸に到着し、長沼理事は、トリノならびにローマにおける残務を処理して、同年2月10日マルセーユ発の熱田丸に乗船し、3月20日に神戸に到着したと報告されている<sup>10</sup>。

トリノ会場においては、明治44年4月29日に開会式がイタリア国王夫妻の臨席のもとで挙行され、ローマ会場では、それに先立って同年3月27日に同じく国王夫妻の臨席のもとで開会式が挙行された。しかしながら、この開会式は形式的なもので、「伊国本館其他僅ニ二三ヶ国ノ外ハ何レモ建築竣工ヲ告ケス」という状況だったという<sup>11</sup>。

日本特別館の開会式当日、イタリア国王夫妻は、林大使の案内によって、各陳列室を御巡幸され、玉座に充てられた参考品室において、日本画家石井柏亭、谷口鴨涯の両氏の席画をご覧になり、午後5時10分ごろお帰りになったという。この日、国王夫妻が玉座に入られたと同時に、西洋画陳列室において、来賓に茶菓を振舞い、その求めに応じて、席画の観覧をおこない、「日本画ノ趣味」を知らしめたという。また、国王夫妻のご帰還後に、予定していなかった一般の観覧を許可したところ、「半時間ニシテ入場者二千余ニ達シ非常ナル盛況ヲ呈シタリ」と、博覧会開催当初の観客の関心の高さが伝えられている<sup>12</sup>。しかしながら、ローマ会場についての全般的な報告では、ローマ会場は、開催期間全体を通じてみれば、トリノ会場に比較して入場者が多くなったと指摘されている<sup>13</sup>。

## 2 日記にみる平山英三のローマ滞在

出品協会理事長として派遣された平山英三は、先に触れたように、イタリア万国博覧会に関して以下のような三冊の手帳に日記を残している。

第一冊目（明治43年12月27日から明治44年7月19日まで）

第二冊目（明治44年7月20日から同年11月17日まで）

第三冊目（明治44年11月18日から明治45年（1912）2月20日まで）

これらの日記によれば、日本特別館の開会式のあった明治44年の4月をはじめとして、その後同年の5月と12月に、計三度ローマを訪問している。

一回目の訪問は、日記の第一冊目に記載されており、期日は明治44年4月21日にトリノを出発し同月24日のトリノ到着までの期間である。以下はその内容である。なお平山の記述からの引用は「」で括った。

**4月21日** 朝6時25分発の汽車にてトリノよりローマに向かう、午後7時20分ごろローマに到着、「ホテルフローラ」に宿泊

**4月22日** 午前8時ごろ、鶴見事務官、石橋氏と博覧会場に赴き、日本特別館の開館準備、その後「ホンガリー」の「レストラン」で午餐、午後4時よりイタリア国王開館式に出席、ホテルで事務官等日本関係者一同饗宴

**4月23日** 午前、会場に赴く、内田氏の午餐に招かれる、午後、長沼氏を訪問した後に今井書記官を訪問、午後9時ローマ発

**4月24日** 午前10時トリノ着

二回目の訪問も同じく第一冊目の日記に記載されており、期日は、5月11日のトリノ出発から同月17日のトリノ帰着までの期間である。内容は以下のとおりである。

**5月11日** 午前6時25分発の汽車にてトリノを出発、午後7時ごろローマ到着、「ホテル、フローラ」

へ「ラムニブス」で到着、その後「鶴見君 今井君」に逢う

**5月12日** 「向側ニ投宿」している長沼理事と「博覧会場」に赴く、「ゼネリーネ氏」に逢う、日本特別館で桑原氏と事務上の打ち合わせ、正午に長沼氏と会場裏手の「小レストラン」で午餐、その後イタリア本館とドイツ館の出品を一覧し、桑原氏とハンガリー館のレストランで小憩、この夜、長沼、桑原、「ゼネリーネ」の三氏と「レストラン、コロナ」で晚餐、その後「電車ニテ帰宿」、さらに長沼氏と「近傍」を散歩し、「茶店ニ憩ヒ」、「アイスクリーム」を喫して帰宿

**5月13日** 「羅馬滞留」

**5月14日** 「羅馬滞留」

**5月15日** 「羅馬滞留」

**5月16日** 「羅馬滞留」 長沼氏と会場に赴く、その後「馬車ニテ裝飾屋」にいたり、その後、大使館において「林大使」と面会、その晩に内田事務官長の招待により「ホテル、エキセルシオール」において晚餐

**5月17日** 鶴見、長沼の両氏とともにローマからトリノへ向かう、午後11時にトリノ着、事務局の石橋氏、協会の小黒氏、森田氏らが駅に出迎え

第一冊目の日記には、末尾近くに、つぎのような氏名と住所が記されている。

Y. Kuwabara

Presso Monsieur Giovanni Massucci

Via Federico Cesi 44, Roma

日記の第二冊目には、ローマ訪問の記載はなく、第三冊目に、第三回目のローマ訪問の記述が以下のようにみられる。

**12月18日** 夕刻6時25分発の汽車でトリノからローマへ向かう、「小黒、小林、深沢、森田ノ諸氏」が見送る

**12月19日** 午前9時ごろローマに到着、出迎えにきた「ゼネリーネ氏」とともに馬車に乗って「ホテル、ジェニヲ」に投宿、馬車を雇って会場の日本館に向かい長沼氏に会う、その後ともに電車で

市中の「レストラン」で午餐、その後また電車で会場にもどる、「セルビア」「スペイン」「ロシア」「ベルジック」の展示館を一覧した後、長沼、桑原、「ゼネリーネ」の三氏と会場から電車にて市中に出て晚餐の後「ウキアナショナル街」のコーヒー店で小憩、その後途中まで桑原氏とともに電車に乗り帰宿

**12月20日** 朝、旅館前のコーヒー店で朝食、電車にて「サンペートル寺院」「バチカン博物館」を訪問、電車にて帰宿し、旅館近くの「レストラン」で午餐、その後、馬車を雇って「パラチノ」「フォーロ、ローマノ」「サン、マリア、マジヨリー寺院」を一覧して帰宿

**12月21日** 午前、日本特別館を訪ね、長沼氏と「ゼネリーネ氏」に会う、昼ごろ長沼氏と電車にて「パンテヤン」近傍の「ロセッタ料理店」において午餐、その後「ピアツツア、ウエネチア」の「珈琲店」で「小憩」、長沼氏と分かれて「ウキトリア、マニュエル帝」の「新モニュメント」を一覧し、大使館に赴くも「大使ハ午眠中」また「吉田其他大使館員」は食事に帰っているとのことで、歩いて「パンテヤン寺院」の内外を一覧し、電車にて「サンペートル寺院」を訪問、午後5時ごろ「ピアツツア、ウエネチア」の「珈琲店」で長沼氏、「ゼネリーネ氏」と会い、両氏とともに「大噴水ノ傍ラナル料理店」にて晚餐、その後「コルソー街ノ珈琲店」に立ち寄り、同街で「活動写真」を一覧

**12月22日** 朝「カステロ、サンタンジロノ博物館」を見学した後、博覧会場に赴き、その後「サンペートル寺院」を見学、12時ごろ「裁判所傍のレストラン」において長沼氏と午餐の後、馬車にて「コロセウム」「カラカラ浴場」「カタコンブス」「サンポーロ寺院」を訪問し、午後6時ごろ長沼氏がホテルに來訪、近くの「珈琲店」にて休憩、その後長沼氏とともにホテル階下の「料理店」にて晚餐の後、午後8時ごろホテルから馬車にて停車場へ、午後9時ローマ発の汽車にてトリノに向かう、「長沼氏及ゼネリーネ氏」が見送る

**12月23日** 午前10時過ぎに「忠林」に到着、馬車を雇いヴィア・ベルトレーの協会事務所の住居に到着

第三冊目の日記には末尾から順につきのよ  
うな住所・氏名が記されている。

Hotel Genio,  
Via Zanardelli,  
Roma

羅馬大使館  
Piazza del Gesu  
Palazzo Altieri

M. Naganuma  
Preso Signora Pifferi  
Via Toscana 30  
Roma

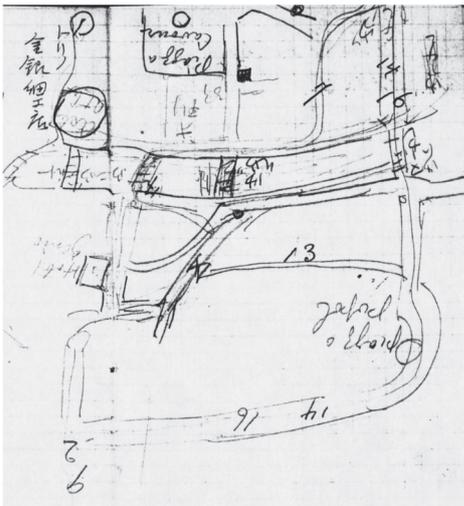


図6

さらに、「Hotel Genio」の住所が記された  
ページには、ホテル周辺と「Piazza del  
Popolo」を含む地区と、橋を渡ったテヴェレ  
川の対岸地区の地図（図6）が手書きされてい  
る。そこには、「裁判所」「Piazza Cavour」  
「トリノ金銀細工店」などの書き込みがみら  
れる。

### 3 日記に登場する人物と住所について

以上のように、平山の日記には、日々の行  
動とともに、交流した人物が詳細に記述され

ている。日記に登場する鶴見・石橋・長沼・  
今井・「ゼネリーネ氏」もしくは「ゼネリー  
ニ氏」・桑原・林大使・内田・小黑・森田・  
小林の各氏については、「ゼネリーネ氏」も  
しくは「ゼネリーニ氏」と記された外国人と  
思われる人物を除いて、出品協会の報告書に  
よって個々に確認することができる。

報告書によれば、日本政府は、一出品団体  
を組織し、これに援助を与え、政府の監督の  
下で参同事業を遂行することに決し、参同事  
業の進行および監督の上で事務官長と事務官  
を任命した。事務官長として特命全権公使の  
内田定槌、事務官として農商務書記官の鶴見  
左吉雄、同じく大使館二等書記官の今井忍郎、  
同じく大使館二等書記官の吉田茂、同じく名  
誉総領事のカナリーが任命された<sup>14</sup>。

伊太利万国博覧会出品協会については、会  
長に武井守正男爵、理事長に平山英三、理事  
に長沼守敬と山本安三郎が任命され、事務員  
として、小倉良、中出哲、楠亨平、深澤理三  
郎、小黑安雄、小林義二が、通信事務嘱託と  
して山本実彦が任命されている<sup>15</sup>。

さらに同協会の「チュラン」出張所事務員  
として現地イタリアにおいて、事務員補とし  
て和田嘉平治、事務嘱託として桑原羊次郎、  
森田菊次郎、堀内静子の四名を採用し、とく  
に桑原羊次郎は、「羅馬美術博覧会勤務」と  
して、その他の者は、「チュラン産業博覧会」  
勤務として採用された<sup>16</sup>。第一冊目の日記に  
みられる「Y. Kuwabara」という記述は、出  
品協会の事務嘱託としてローマ会場に勤務し  
た桑原羊次郎を指すものであろう。

「Y. Kuwabara」の名とともに記載されてい  
るフェデリコ・チェージ街44番地（「Via  
Federico Cesi 44」）（図7）と読める住所  
は、裁判所の裏手にあたるカヴール広場  
（Piazza Cavour）からリベルタ広場（Piazza  
della Libertà）を経てマルゲリータ橋（Ponte  
Margherita）へいたる街路である。この通り  
から、マルゲリータ橋を渡って、対岸のポポ  
ロ広場（Piazza del Popolo）に向かい、ポポロ  
門（Porta di Popolo）から緩やかな坂道を北



図7

東に向かって登ってゆくと博覧会場にいたることとなる。博覧会場に近い住宅街であるフェデリコ・チェージ街に桑原洋二郎は居住していたと考えられる。

吉田茂については、報告書では大使館二等書記官となっているが、外務省外交史料館所蔵の『伊国羅馬市及チュラン市ニ於テ万国博覧会開設一件 第二巻』には、「明治四十四年五月十五日 農商務官 届」として、「大使館三等書記官 吉田茂」を「伊太利美術博覧会本邦出品ニ関スル事務取扱ヲ囑託ス」という記述をみることができる。この記述にもとづけば、吉田茂は、とくにローマにおける万国美術博覧会のために現地大使館の書記官として駐在したと考えられる。

「ゼ子リーネ氏」もしくは「ゼネリーニ氏」と記載された人物については、10月2日の記録に、「羅馬ヨリ協会雇ゼネリーネ氏来着ス」とあり、出品協会が現地で雇った人物と思われるが詳細は不明である。

第三冊目にみられる「羅馬大使館」とは、日本大使館のことであるが、ここに記載された「Piazza del Gesù」は、イエズス会の教



図8

会である Chiesa del Gesùがある広場であり、「Palazzo Altieri」は、この広場に面して当時の面影を残して存続しているパラッツォ・アルティエリ（図8）である。万国美術博覧会開催当時、日本の駐イタリア大使館は、このパラッツォにあった。

現在民間銀行などが入居しているこのパラッツォは、17世紀の後半に法王クレメント10世などによって建てられ、そのファサードのデザインは、ボッロミーニによるオラトリオ・サン・フィリッポ・ネーリ（Oratorio S. Filippo Neri）ならびにパラッツォ・デッラ・コングレガチオーネ・ディ・プロパガンダ・フィーデ（Pallazo della Congregazione di Propaganda Fide）などのバロック宮殿風ファサードやパラッツォ・バルベリーニ（Pallazo Barberini）のファサードに比較して、やや古式のバロック様式とみられるが、そのプランは、ローマ風バロック様式の階段によって特徴づけられているとされ、ジェズ広場周辺地区の重要な建造物と評価されている<sup>17</sup>。また第一次世界大戦前、1908年の3月1日付のニューヨークタイムズのローマにおけるアメリカ大使館に関する記事<sup>18</sup>において、日本の大使館として使われているパラッツォ・アルティエリが、ローマ市内の貴重なパラッツォであることが言及されている。

第一回目と二回目に平山が投宿したホテルである「フローラ」もしくは「フローラ」は、ヴィットリオ・ヴェネト街（Via Vittorio Veneto）にある現在のGrand Hotel Floraとも考えられるが不明である。5月16日に内田事

務長官が平山らを晚餐に招待した「ホテル、エキセルシヨール」は、おそらく同じく街区に現在も存続している Hotel Excelsiorかと思われるが不明である。

第三回目のローマ訪問時に平山が投宿した「ホテル、ジェニオ」は、日記に記載され



図9

た住所にみられる「Via Zanardelli」の「Hotel Genio」と思われるが、同名のホテル（図9）が現在も同住所に存続している。平山が手書きした地図にも、「Hotel Genio」と読み取れる書き込みがあり、その位置も現在のホテル・ジェニオ（Hotel Genio）のものと一致している。このホテルのあるザナルデッリ街は、ナボーナ広場（Piazza Navona）の北側に位置し、テヴェレ川に架かるウンベルト一世橋（Ponte Umberto I）につながり、「裁判所」（Palazzo di Giustizia、現在Corte Suprema di Cassazione）の正面にいたる主要な街路であり、カヴール広場に沿ってフェデリコ・チェージ街に進むことができ、桑原洋二郎の住所に近い宿としてこのホテルが選ばれたとも考えられる。また「トリノ金銀細工店」と書き込まれた店舗については現在不明である。

第三冊目の日記にみられる「M. Naganuma」とは、長沼守敬を指すものとして間違いない。その住所として記載されているトスカーナ街30番地と読める「Via Toscana 30」は、ヴィットリオ・ヴェネト街の二区画東側に位置する住宅街といえる街区である（図10）。

日記の記述によれば、平山と長沼守敬は非常に親密に行動をともにしていたことが読み

とれる。ふたりは、博覧会場以外に、ローマ市内の目抜き通りといえるコルソ街（Via del Corso）、ナチオナーレ街（Via Nazionale）、あるいは主要な広場であるロトンダ広場（Piazza della Rotonda）、ヴェネチア広場（Piazza Venezia）などで、昼食ならびに夕食をとともにし、珈琲店に憩い、散歩している。一例として12月21日の記述をみるならば、博覧会場で長沼に会った平山は、長沼とともに会場から電車を使って「パンテヤン」近傍に移動し、「ロセッタ」という料理店で昼食をとり、ヴェネチア広場の「珈琲店」で小憩している。長沼はその後会場にもどるが、平山は、ヴィットリオ・エマニュエル二世の記念碑を見学し、パンテオンの内外を一覧するなどした後に、その日の午後5時ごろ再びヴェネチア広場の「珈琲店」で長沼氏と「ゼネリーネ氏」と会い、三人は、「大噴水ノ傍ラナル料理店」にて夕食をともにして、「コルソー街ノ珈琲店」にて「小憩」し、同じ通りで活動写真を一覧している。平山は、この「珈琲店」について、「内部ノ裝飾鏡又美ナリ、蓋シ羅馬市ノ一等店ナリト云フ」と感想を書き残している。ま



図10

た「大噴水」とは、ヴェネチア広場とコルソ街との位置関係を考えるならば、トレヴィの泉 (Fontana di Trevi) ではないかと考えられるが不明である。

日記にもとづけば、三回目のローマ滞在において、平山が博覧会場以外のローマ市内を広範囲に見学していたことが読みとれる。宿舎とした「ホテル、ジエニヲ」から、テヴェレ川を渡ったサンタンジェロ城の博物館、サン・ピエトロ大聖堂とヴァチカン博物館、パンテオンに加えて、コロッセオ、フォロ・ロマーノ、パラチーノ、カラカラ浴場などの古代ローマ時代の遺跡やヴィットリオ・エマヌエル二世記念碑などの最新のモニュメント、さらにサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂や旧城壁の外側に位置するサン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ大聖堂、カタコンベなどのキリスト教関連の宗教施設まで馬車を雇って見学している。

平山が見学した場所は、今日でもローマ市における重要な遺跡、博物館、宗教施設、そして記念碑であるが、見学のさい「馬車」以外に、「ラムニブス」「乗合自動車」「電車」など最新の交通手段を使って移動していたこととは見逃せない。こうした平山のローマにおける体験にくわえて、イタリアにおける平山と彫刻家長沼守敬との親密な交流もまた見逃すことができない。

#### 4 平山の日記にみる長沼守敬の動向

平山の日記によれば、万国美術博覧会が開催されたローマのみならず、万国産業博覧会が開催されたトリノにおいても平山と長沼のふたりが非常に親密に行動していたことが読みとれる。出品協会の理事としてイタリアに派遣された長沼守敬自身もトリノとローマでの博覧会に関連した日記<sup>19</sup>を残しており、また短いながら回想を発表している。

長沼の日記では、明治43年12月7日に横浜より長沼が出発するさい、「平山英之君」なる人物が見送りに来たとの旨が記述されてい

る<sup>20</sup>が、これは「平山英三」の誤りであろう。さらに長沼の日記では、明治45年の1月末から2月までのトリノにおける残務整理の終了の記述と、ローマでの残務整理から「ゼノア」を経て「マルセーユ」から帰国するまでの期間の動向が記録されている。そこには、「ゼ子リーニ氏」など平山の日記にしばしば登場する名前があるものの、この期間にすでに帰国の途についていた平山に関する記述は見られない。

平山の日記では、明治44年2月23日に平山がトリノに到着したさい、「長沼理事」が出迎えに来ていたとの記述にはじまり、同年12月22日に平山がローマからトリノに戻るさいに「停車場」に長沼氏と「ゼネリーネ氏」が見送りにきたという記述にいたるまで、およそ十か月にわたるイタリア滞在期間中の長沼との交流が詳細に記録されている。

第一冊目の日記では以下のように記録されている。(先にみた平山の三回に及ぶローマ滞在の記録を除く)

2月23日 平山 午前10時35分に「トリノ府」に到着、長沼理事、鶴見事務官らとともに出迎え

2月24日 長沼氏と「某割烹店」にて午餐、「珈琲店」にて「珈琲」をともに飲む

3月1日 長沼氏と鶴見事務官を訪ね、事務の協議をし、晩に鶴見事務官に日本料理をふるまわれ、帰路「ポー河畔」を長沼氏と散歩

3月4日 長沼氏と仕立て屋に赴き、洋服を注文

3月5日 長沼氏、和田氏、深沢氏らと「トリノ市外ノ墓地」を見学

3月8日 午後3時長沼理事「ゼノア」を経てローマに向かう

4月21日から4月23日まで 平山の第一回目のローマ滞在

4月30日 開館準備、夜12時ごろ、翌日イタリア国両陛下の来館ありとの連絡があり、その対応を長沼氏と相談する

5月1日 イタリア国王夫妻来館のために長沼氏とさまざまな調整をおこなう

5月2日 長沼氏ならびに「御木本真珠店出張員

小林氏」らと市中を散歩

5月7日 長沼氏とともに「モリナリー料理店」にて午餐、帰途に仕立て屋に立ち寄り服の仕立てを注文

5月9日 夕刻8時10分の汽車にて長沼氏がローマに赴く

5月11日より5月17日まで 平山の第二回目のローマ滞在

5月19日 長沼氏と博覧会場内を「乗合自動車」で移動し、午後、長沼氏と郵便局、仕立て屋などに立ち寄る

5月29日 午前、長沼氏と日本事務局を訪問

6月3日 「応用美術館ノ陳列替ニ長沼氏ト共ニ従事ス」、石井柏亭が会場に来る、晩に事務所において長沼氏らと晚餐をなす

6月6日 長沼氏らと晚餐

6月7日 「長沼氏ト共ニ市中ニテ買物」

6月8日 「長沼理事ト共ニホテル、ド、チュランニ内田事務官ヲ訪問」

6月12日 「長沼氏ト共ニ雨中馬車ニテ帰宿」

6月14日 イタリア側博覧会関係者を長沼氏らとともに晚餐に招待

6月20日 午前、長沼理事とともに工業館・農業館・応用美術館を訪問、晩に長沼氏らと事務所において「日本飯ヲ喫ス」

7月4日 午前、長沼氏とともに「美術博物館 Museo Civico」を訪問、一覧した後仕立て屋にいたり服を注文し、帰途買物をする

7月6日 長沼氏とともに鶴見氏を訪問、ローマより吉田書記官来る

7月10日 朝、長沼氏と「ホテル、チュラン」に吉田大使館書記官を訪問、夜、長沼氏ローマに出張

7月17日 長沼氏 ローマより帰着す

7月19日 朝長沼氏とともに「ホテル、チュラン」に内田事務館長を訪問

以上が第一冊目の日記にみられる長沼氏の動向である。第二冊目は以下の通り。

7月21日 林大使を「停車場」に長沼氏と出迎え

7月23日 事務局において長沼氏と即売に関する

イタリア側からの回答を鶴見事務官から聞く

7月24日 午前、林大使を「ホテル、ド、ユーロプ」に長沼氏と訪問、午後、林大使と内田事務官を長沼氏らと「停車場」に見送る

7月27日 長沼氏とともに鶴見事務官を訪問し事務上の協議をおこなう

8月1日 夕刻、長沼氏と「両替屋」で両替

8月2日より8月16日まで 平山のウィーン訪問

8月17日 「我軍艦鞍馬、利根」の両艦が「ゼノア港」に寄港、トリノにおいて両艦の士官50名以上を長沼氏らとともに博覧会場内の「パーク、レストラン」において「午餐ノ饗応」、その夜「ホテル、ユーロープ」において司令官その他将校を招待し晚餐の饗応、出品協会の代表として長沼氏とともに出席

9月2日 晩に事務所において長沼氏の調理にて日本料理をなす

9月3日 朝、長沼氏とともに市中の「紙屋」で「絵葉書等ノ買物」

9月7日 晚餐の後、事務局を長沼氏と訪問し協議

9月18日 「Via Roma街」で長沼氏と買物

9月19日 午前、長沼氏と「ホテル、ド、チュラン」に林大使を訪問

9月21日 長沼理事らと「綜合審査」に関して協議

9月26日 長沼理事らと協会事務上の協議

9月27日 長沼理事らと「日本デー」関係の件について協議

9月28日 鶴見氏と長沼氏とで事務上の協議、長沼氏らと「博覧会場内仏国レストラン」において晚餐

9月29日 「長沼理事本夜羅馬ニ赴ク」

10月8日 「長沼理事羅馬ヨリ帰林セラル」

10月9日 長沼氏と「洋服屋」で服を注文

10月11日 午前長沼理事と「羅馬博覧会」の審査に関して取調べ、午後鶴見事務官も加わり協議

10月13日 夕刻長沼氏らと丸山晩霞と町田曲江らを「モリナリー料理店（サンタ、テレサ街）」に招き会食

10月16日 午前日本事務局で長沼氏とともに鶴見事務官と「羅馬博覧会」に関して協議、午後長

沼氏と「古物博物館」を見学

10月18日 朝、長沼氏と「仕立屋」に赴き、「衣服ノ仮縫ノ試着」、午後長沼理事と各国のパビリオンを回り「陳列方又ハ装飾ノ参考トナルヘキモノヲ選シ今後報告材料トスル写真」を現地で雇った「トリノ市高等工業学校生徒」に撮影させる

10月19日 長沼理事らと「会場内式場館ニ於テ午前十時ニ举行セラルヘキ褒賞授与式ニ参列ス」  
「本夜日本事務局ニ於テ日本料理ノ設ケアリ余ト長沼氏ノ兩名招待ヲ受ケテ之ニ赴ク」

10月20日 長沼理事と鶴見事務官らを「会場内フランス、レストラン」に招待

10月27日 「長沼理事本夕八時十分ノ汽車ニテ羅馬ニ出張ス」

以上が第二冊目の日記にみられる長沼の動向である。第三冊目では以下のような記述がみられる。

11月18日 「本夜十一時頃長沼理事羅馬ヨリ帰ラルルノ報アリ門ノ鍵ヲ要スルニ付堀内氏ト共ニ停車場ニ同理事ヲ出迎ヘテ相伴ヒ帰宿ス」

11月20日 前日の19日が博覧会の最終日であったため、この日は協会員その他一同休暇をとって、トリノから鉄道で40分ほど離れたAvighianaにおいて「清趣ヲ試ム」、Avighianaよりトリノに戻ったその夜、晚餐を長沼氏と「停車場近傍ノ料理店」において喫し帰宿

11月27日 「本夜八時十分ノ汽車ニテ長沼理事羅馬ニ出発ス」

12月19日より12月22日まで 平山の第三回目のローマ訪問

以上のように平山の日記によれば、ローマだけでなくトリノにおいても、公的な仕事以外にも、平山と長沼は、日々の昼食や夕食をともにし、カフェで休憩し、市中を散歩し、洋服を仕立て、買物をし、9月2日の記述にみられるように、長沼はみずから日本料理を調理しふるまってもいたことが知られる。

そのなかで、7月4日には、平山と長沼は、トリノ市の「美術博物館 (Museo Civico)」

を見学し、また10月16日には、同市の「古物博物館」を見学していることが注目される。トリノ市の博物館については、長沼守敬自身も回想のなかで、フォンタネージに触れながら、つぎのように回想している<sup>21</sup>。

フォンタネージは伊太利へ行って視ると相当名を売っている。フロレンスの博物館でも彼の絵を見たし、私が三回目、明治四十四年伊国行き折チュリンの博物館にも沢山彼の遺作が展覧に供せられていた。ところが、滑稽な事には彼の遺作と称して並べてある中に、彼の生徒である小山正太郎君、浅井忠君などの鉛筆画が沢山混じっていた。博物館の当事者が眼がない為に、フォンタネージが多分出来のよい生徒の作品を送ったのを、彼の作品と誤って陳列したのであろう。又、それだけ生徒の作品が先生の物に似過ぎていたとも云えよう。私は注意しようと思ったのであるが、傍に誰もいなかったので其儘出て来てしまった。

この回想には平山の名前が登場しないが、長沼が訪れた「チュリン」の博物館とは、平山の日記にみられる「美術博物館 (Museo Civico)」であったと考えられる<sup>22</sup>。平山の日記には、「館中陳列スル所ノモノハ主トシテ近世ノ伊国ノ美術家ノ作ニ係ル油絵及大理石彫刻物ナリ」と記されているのみで、長沼が指摘した小山、浅井らの作品と思われる鉛筆画があったことには触れられていない。しかしながら、平山と長沼のふたりが、フォンタネージが教鞭をとったアルベルティーナ美術アカデミーのあるトリノの地でフォンタネージの作品とともに若き日の浅井や小山らの作品に出合ったさい、深い感慨を覚えたであろうことは想像に難くない。

## おわりに

以上ローマにおける万国美術博覧会において平山英三は、その日記を詳細にみるならば、

ローマというヨーロッパを代表する歴史的かつ国際的な都市を広く体験するとともに、彫刻家長沼守敬との交流を親しく深めていたことが明らかになった。こうした長沼との交流もふくめた平山のローマ体験において、もっとも注目すべきことは、ヨーロッパにおけるアール・ヌーヴォーやセセッションなどに代表される世紀転換期の様式からの変化であったといえる。平山は、「電車」や「ラムニブス」が走るようになった都市において、建築のエクステリアからインテリアまでもふくむ多様な工業製品の意匠図案における変化を直接体験したといえよう。こうした変化の体験にもとづいて平山は、日本で生み出される日用品や家具調度品の意匠図案の改良を強く訴え、日本人によるヨーロッパ製品の様式模倣を厳しく批判したと考えられるのである。

## 註

- 1 天貝義教「明治末期のアール・ヌーヴォー・ならびにセセッション様式模倣に対する平山英三の批判について」デザイン理論 第63号 2013年 pp. 112-113
- 2 『伊国羅馬市及チュラン市ニ於テ万国博覧会開設一覽』
- 3 伊太利万国博覧会出品協会編纂『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』大正元年（1912）
- 4 農商務省編纂『伊太利万国博覧会出陳新古美術品図録』明治44年（1911）
- 5 註3前掲書 p. 344
- 6 註3前掲書 p. 343
- 7 註3前掲書 pp. 151-152
- 8 註2前掲書
- 9 註3前掲書 pp. 298-299
- 10 同上書 p. 438
- 11 同上書 pp. 339-342
- 12 同上書 pp. 342-343
- 13 同上書 p. 461
- 14 同上書 p. 151
- 15 同上書 pp. 159-160, pp. 174-175
- 16 同上書 p. 302
- 17 Stefan Grundmann ed., The Architecture of Rome, Edition Axel Menges, Stuttgart/London, 1998. pp.223-224
- 18 The New York Times, March 01, 1908.
- 19 澤田浦子『長沼守敬のこども』長沼守敬資料刊行実行委員会 平成10年（1998）pp. 120-135. また平成18年（2006）に発行された「長沼守敬とその時代展」カタログにも「長沼守敬 渡航日誌 明治43年12月7日」（152頁～155頁）と題されて日記が掲載されている。
- 20 同上書（平成10年）の121頁ならびに同上書（平成18年）の152頁
- 21 同上書（平成18年）p. 143
- 22 Museo Civico（トリノ市美術館）は、現在では、トリノ市マジェンタ街（Via Magenta）にあるGAM-Galleria d'Arte Moderna e Contemporanea Trinoとなっている。また「古物博物館」とは、現在のエジプト博物館（Museo Egizio-Museo della Antichita Egizie）の前身であるMuseo d'Arte AnticaもしくはMuseo d'Antichita ed Edizioと呼ばれていた博物館と思われる。

本研究は科研費（課題番号26350015）の助成を受けた。